

化学療法に伴う味覚障害発症患者における味覚センサーを用いた嗜好性の検討

研究分野：臨床栄養学、栄養科学

キーワード：味覚障害、化学療法、味覚センサー、栄養ケア

貢献できるSDGsの区分：



看護栄養学部 栄養健康学科 助教 花村 衣咲

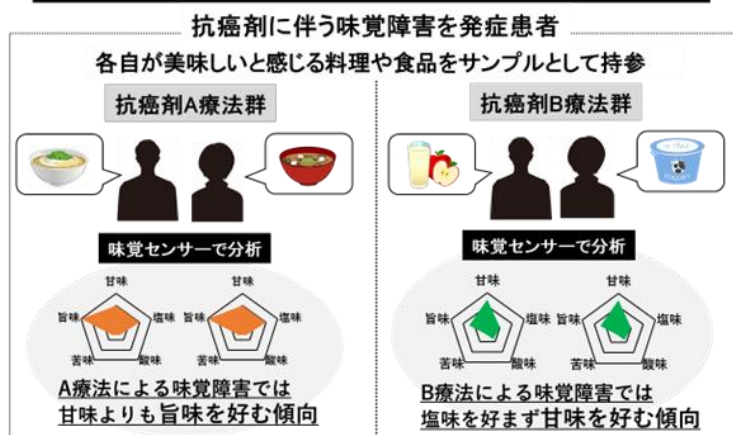
教員情報URL <https://sun.ac.jp/researchinfo/hana-isuk/>

研究概要

抗癌剤治療に伴う味覚障害は発症頻度が高いものの、メカニズムや治療法は確立されていません。基礎研究では、抗癌剤ごとに味蓄や味受容体（味を感知するセンサー）の発現状態に差があることが報告されています。したがって、抗癌剤治療に伴う味覚障害と言っても、味覚認識に差があることが想定されます。

本研究では、外来化学療法における味覚障害誘発患者を対象として、抗癌剤間で特徴的な味覚障害の症状と嗜好性がみられるのか、さらに味覚障害発症下で摂食可能な食品を味認識装置（TS500Z）で数値化することで、嗜好性を数値化し、栄養指導のエビデンス構築に繋がります。

Q: 抗癌剤により発症する味覚障害では抗癌剤によって特徴的な嗜好性を示すのではないかと？



→ 治療ごとに味覚障害発症時の嗜好性を特定できれば味覚の視点での治療支援の実現に向けたエビデンス構築の一助とする。

産学連携の可能性(アピールポイント)

味覚障害といっても、単に味覚減退を引き起こすだけでなく、乖離性味覚障害、自発性異常味覚、悪味症と症状は様々です。また、抗癌剤治療において味覚障害を発症された患者様では、甘味を強く感じる、酸味なら感じるなど特定の味の認識は可能である症例も報告されています。そのような症状を有する状況下にあっても、味覚という視点からの栄養ケアを実現したいと考えています。本研究により、各種抗癌剤で誘発する味覚障害の特徴と嗜好性を数値的に捉えることで、患者様で活用していただける抗がん剤治療中のガイドラインやアプリ等の開発につながる可能性があります。

外部との連携実績等

- ① 長崎県がん拠点病院との連携。
- ② 病態栄養学会若手助成金の獲得。
- ③ 日本病態栄養学会年次学術集会における学会発表の実施。